

構文選択の動機と格関係交替現象 —選択体系機能言語学の視点—

福田 一 雄

0. はじめに

わたしたちは、それが現実の出来事であろうと想像上の事柄であろうと、同一の事態をいくつかの異なる構文で表現することができる。それらの構文は、わたしたち言語主体によって個別言語の文法の選択体系網から選び取られるものである。M. A. K. ハリデーによって創始された選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics : 以下 SFL と称する) は、言語体系と言語主体をつなぐ「選択」というダイナミックな関係を理論の根幹に据えている。

本稿は、同一事態を示す異種構文の選択に関与する機能論的動機のいくつかを考察しようとするものである。さらに、構文の選択によって、格交替が生じる場合とそうでない場合を検討する。

構文選択の機能論的動機を考えるに当たって、SFL が提案する3つのメタ機能にそって、(a) 観念構成的動機 (ideational motivations), (b) 対人関係的動機 (interpersonal motivations), (c) テキスト形成的動機 (textual motivations) に分けて順に議論することにする。最初に、これら3つのメタ機能について簡単にまとめておく。観念構成的メタ機能とは、自己の内的世界および外的世界における経験を解釈し構築するための基本的な仕組みとしての節の機能であり、過程構成 (transitivity)⁽¹⁾がその中心を占める。対人関係的メタ機能とは、叙法 (mood) とモダリティ (modality) からなり、話し手・聞き手のメッセージ交換の双方向性を示す機能である。最後にテキスト形成的メタ機能は、テキストのテキスト性 (texture) を保証する意味的・構造的特性に関する機能であり、結束性 (cohesion) や首尾一貫性 (coherence)、主題・題述構造 (theme/rheme structure) にかかわる機能である (福田 2002:37 参照)。

一般に、格は文法格 (grammatical case) 〈主格, 対格, 与格, 斜格〉と意味格 (semantic case) あるいは意味役割 (semantic role) 〈行為者, 対象, 感覚者, 現象, 体现者, 属性, 等々〉に分かれる。SFL では文法格に関する詳しい議論は見あたらないが、主語に関する議論と平行するとすれば、おそらく言語の対人的メタ機能に属する概念とみなされているのであろう。他方、意味役割はきわめて明確に観念構成的メタ機能に属する概念とされている。

たとえば、主題、主語、行為者のような概念は3つのメタ機能との関連で次のように把握される。

- (1) I caught the first ball. (cf. ハリデー 2001: 46)

主題

主語

行為者

上例 (1) の ‘I’ は主題 (theme) である。主語 (subject) でもある。さらに同時に行為者 (actor) でもある。この3つの名称は言語の異なるメタ機能に対応している。すなわち主題は ‘clause as a message’ にかかわるテキスト形成的メタ機能に、主語は ‘clause as exchange’ にかかわる対人関係的メタ機能に、そして行為者は ‘clause as representation’ にかかわる観念構成的メタ機能に、それぞれ対応している。SFLでは主題はメッセージの起点であり、行為者は過程構成においてなんらかの行為をする参与要素である。SFLの主語の位置づけは次のようである。

- (2) 主語というのは、「交換としての節clause as exchange」の構造において機能するものである。節は意味交換、つまり話し手と聴き手の間のやりとりとしての意味をもつ。主語は、意味交換のための保証である。それは、話し手が、自分が言っていることの妥当性にかかわる責任を負わせる要素なのである。

(ハリデー 2001:47)

1. 観念構成的動機

構文選択や格交替の動機として、観念構成的動機というようなものが果たして考えられるであろうか。先に結論めいたことを言ってしまうと、観念構成的動機だけが独立して構文の選択を支配することはまれであり、対人関係的動機やテキスト形成的動機と複合しているということに注意すべきである。

かりに観念構成的動機が独立的に考えられるとしても、それは動機というよりはむしろ観念構成的制約と言うべきであろう。すなわち、通常、言語主体は観念構成的メタ機能を見現するための過程構成については特定の個別言語に存在する構成のパターン以外は利用できないからである。たとえば次の文をみてみよう。

- (3) Recent years have witnessed the collapse of the steel industry. (=心理過程)

感覚者

過程中核部

現象

(Longman Dictionary of Contemporary English 4th, s.v. ‘witness’)

例文 (3) はいわゆる無生物主語構文あるいは物主構文と呼ばれるものである。(3) の過程構成のタイプは心理過程であり、過程中核部は ‘have witnessed’ であり、参与者 ‘Recent years’ は意味格〈感覚者〉である。‘the collapse of the steel company’ は意味格〈現象〉である。普通、感覚者は有生であるが、(3) では無生である。Halliday (1994:344 他) は (3) のような場合を文法的メタファーとしての観念構成的メタファーと呼んでいる。ただし、重要なことは英語で (3) の過程構成を選択する動機は、個人の好みなどを別にすれば、

独立した観念構成的動機によるというよりも、むしろ第3節で取り上げるテキスト形式的動機に関係するものだろう。

従って、観念構成的動機（実際は制約あるいは制限）は、特定の個別言語内の選択の動機というよりは、異なる言語間の翻訳の場合にこそ有用な概念だと言える。たとえば、(3)の無生の感覚者を持つ心理過程の文は、普通、日本語には存在しない。(3)のより自然な日本語訳の1例は次のようなものであろう（任意の付加的要素として「相次いで」を加えた）。

- (4) 近年は、鉄鋼産業の倒産が 相次いで 起こっている。(= 存在過程)
 状況要素 存在者 状況要素 過程中核部

英文(3)は心理過程だったが、日本語訳(4)の過程構成は存在過程になっている。(4)の意味格〈感覚者〉の‘recent years’は(4)では状況要素「近年は」に変わりその意味格は〈期間〉に変化している。(3)では〈現象〉であった「鉄鋼産業の倒産」は意味格〈存在者〉になり、過程中核部は「起こっている」になった。このことは、日英両言語の観念構成的制約、すなわち過程構成のずれから生じる選択の違いである。

2. 対人関係的動機

SFLで主格の概念が問題になるのはおそらく対人関係的メタ機能においてであろう。なぜなら、SFLで主語の役割が問題になるのは、対人関係的メタ機能を具現する叙法構造においてであり、主語が問題になるのであれば、文法格としての主格も当然関わりを持つてくるはずであると筆者は考えるからである（ただし Halliday 1994においては、文法格についての言及は、意味役割についての扱いに比して圧倒的に軽微なものとなっている）。SFLの叙法構造は、たとえば次のように分析される。

- (5) The duke has given that teapot away. (ハリデー 2001:110)
 主語 定性
叙法部 残余部

すなわち、叙法部 (Mood) は主語 (Subject) と定性 (Finite) からなるとされる。また、SFLでは主格と主語は区別され、主格の格変化を伴わない場合でも、付加疑問文の主語になれる名詞句はすべて主語であると定義されている (ハリデー 2001:109)。⁽²⁾ SFLにおける対人関係的メタ機能は叙法とモダリティに関しては詳細な検討を行っているが、発話機能 (speech function) に関してはそれほど詳しく扱っていない。本稿では、構文の選択と格交替との関連で、むしろ発話機能に焦点を当て、社会的語用論 (social pragmatics) の中心課題の一つであるポライトネス (politeness) をSFLの対人関係的メタ機能に組み込んで考えてみたい。言語の対人関係的機能は、当然、さまざまな発話機能、あるいは発語内行為 (illocutionary act)、あるいは含意 (implicature) と緊密に結びついている。たとえば次の2つの英文を比較されたい。

- (6) a. You should finish the task quickly.
 b. It is necessary that the task be finished quickly

(6a), (6b) はBrown and Levinson (1987:190-191) を参考に作例したものである。Brown and Levinson (1987) の提案する消極的ポライトネス (negative politeness) の第7方略に「話し手・聞き手とともに非人称化せよ」というものがある。(6a) の日本語訳の1例は「君は急いでその仕事を終えるべきだ」であるから、聞き手の個人的領域を侵害し、行為を押しつけるという体面損傷行為 (Face-Threatening-Act: FTA) を生じさせるおそれがある。一方、(6b) は話し手も聞き手も発話の表面に現れない非人称的構文になることによって、消極的ポライトネスを示す対人関係的機能を果たしている。

格交替という点から言えば、(6a) の主格は 'you' であり、'the task' は対格になっている。一方、ポライトネス方略の (6b) はいわゆる外置構文になっていて、主節の主語は形式的 'it' であり、従節の主語は受け身主語の 'the task' である。これらはいずれも主格主語である。ポライトネスという対人関係的動機によって、(6a) から (6b) へと主格になる要素が交替している。(6a) と (6b) の違いが対人関係的動機による文法格の変化だとして、では、前節で見た観念構成的な過程構成に変化があるかどうか見てみよう。(6a) では主格の 'you' が物質過程における意味格〈行為者〉となり、対格の 'task' が意味格〈対象〉になっている。一方消極的ポライトネス方略の非人称的構文である (6b) では、主節の主格の 'it' は過程構成においては関係過程の意味役割〈体现者〉となり、'necessary' という〈属性〉を体现している。

なお、Halliday (1994 第10章) によれば、(6a) の法助動詞 'should' は 'modulation' (おおよそ、いわゆる 'deontic' に相当) を示し、指向性 (orientation) は 'subjective and implicit' を示し、字義的 (congruent) である。一方、(6b) は対応するモダリティが複文の主節内で表示されている 'objective and explicit' な表現であり、文法的メタファーとしての対人関係的メタファーであるとされる (福田 2002:43-46 参照)。

このように、対人関係的動機が文法格交替を引き起こす場合、同時にそれが観念構成的過程構成におけるプロセス・タイプの種類とその参与要素が担う意味格 (あるは意味役割) に変化を与える場合があることに注意したい。最後に、テキスト形成的機能と構文選択および格交替の関係について考えてみたい。

3. テキスト形成的動機

テキスト形成的メタ機能では、主語や行為者に代わって主題 (theme) の機能を考えることになる。本節ではまず能動文と受け身文を取り上げ、続けて名詞化構文について議論する。まず態の例を見てみよう。

- (7) a. Mary hit John.
 Theme Rheme

b. John was hit by Mary.

Theme Rheme

テキスト形成的には (7a) における 'Mary' は無標主題 (unmarked theme) であり、その後続部分はすべて題述 (rheme) である。(7b) では受け身主語 'John' が無標主題であり、その後続部分が題述である。テキスト形成の面では特に主題と主題の間の連続性、題述から主題への連続性が、テキストの結束性や首尾一貫性を支えることになる。そして主題の選択は話し手の専決事項であるのだが、その選択の決定は言語文脈と状況文脈の双方に基づく話し手の想定にかかわるものである。

この主題・題述構造の選択は、テキスト形成的動機に基づくとともに、対人関係的な叙法構造における文法格や、観念構成的機能にかかわる意味格に変化を生じさせることがある。(7a) の主格主語 'Mary' が (7b) で斜格になり、(7a) 対格 'John' が (7b) の主格に交替している。ただし、要素の位置は変わってもそれらが担う意味格には変化がない。したがって能動から受け身への変化は、主題構造上は大きな変化があるが、観念構成上は根本的な変化を示さないとと言える。過程構成に関しても、(7a)、(7b) とも「ぶつ」、「ぶたれた」という物質過程であり、行為者と対象がそれぞれ具現している。

一方、(8) に見られるように、態の変換が常に無条件に許されるわけではない。

(8) a. I bought a funny book at the university bookshop.

b. *A funny book was bought by me at the university bookshop.

(8b) の不適切性を第2節の対人関係的動機に帰すことは不適當である。むしろ特定の言語的コンテキストや状況のコンテキストにおけるテキスト形成に関わる現象である。(8a) はごく普通に話し手 'I' を無標主題にした文であるが、(8b) は不定的特定 (indefinite specific) である 'a funny book' を受け身文の無標主題にしようとしている。そしてby動作主のような通常は題述的卓立 (rhematic prominence) が置かれるべき位置に旧情報であり伝達情報量の低い要素 'me' を配置している。そのため (8b) は 'me' に対比強勢を置かない限り不適切な文である。⁽³⁾ (8b) の 'A funny book' が 'That funny book' のようになれば少しばかり容認度が高まるだろう。先行文脈との結束性の 'tie' が付与されるからである。しかし、それでもなお、'by me' が動作主であるため、不適切性は残る。次に名詞化 (nominalisation) の例を見てみよう。

(9) a. The argument to the contrary is basically an appeal to the lack of synonymy in mental language. (Halliday 1994:352)

b. In order to argue that [this] is not so [he] simply points out that there are no synonyms in mental language. (Halliday *ibid.*) .

(9a) は名詞化を利用して意味的に凝縮された文である。ハリデーはこの種の名詞化を文法的メタファーとしての観念構成的メタファーに分類している。一方 (9b) は (9a) を字義通りにいわば解凍した文である。解凍の過程でブラケットの中の語を補う必要がある。

(9b) を和訳すれば、「このことがそうではないと反論するために、彼は心理的言語のなかには同義語というものがないということをもっぱら指摘しているのである。」となる。こう訳してみてもあらためて (9a) を読んでみると、(9a) を選択する動機はテキスト形成的には、‘The argument’ をメッセージの起点にしようとする、先行文とそれを結びつけようとする、あるいは、それを文の組み立ての土台としようとするなどが考えられる。また SFL で言う文化のコンテクストとしてのジャンルの面では、おそらく科学的客観性を重んじる書き言葉で好まれる構文であろう。他方、第2節の対人関係的動機としては、読者に対して、時間性、空間性、行為者などの具体性を捨象して、名詞句を連続させることにより、‘argument’, ‘appeal’, ‘lack’ などがすでに存在前提を持った実体であるかのような説得力を発揮している。これは対人関係的機能の一つであると言える。

格交替の点ではどうだろうか。文法格はあきらかに変化している。主格だけを考えても、‘argument’ から ‘he’ へ変化している。意味格を考えてみる。まず (9a) のプロセス・タイプは関係過程であり同定節となっている。‘argument’ が意味格〈被同定者〉であり、‘appeal’ が意味格〈同定者〉である。(9b) の ‘points out’ は発言過程を示す過程核部と解釈できる。その場合、‘he’ は意味格〈発言者〉となり、that節すべてが意味格〈報告内容〉である。したがって (9a, b) の場合は、(7a, b) の場合とは違って、文法格だけではなく意味格も変化している。

構文選択のテキスト形成的動機には以上のように、(7a), (7b), (8a), (8b) に関与する主題構造と、他方、(9a), (9b) に見られるようにジャンルの特性が要求する文体という動機がある。たとえば科学論文は観念構成的メタ機能を具現する過程構成のタイプとして「関係過程」を多用することが知られている。

筆者は主題構造を結束性の装置の1種と考えている。なぜなら主題構造は節の内部構造および節を取り巻く共テキスト (co-text) との結束性に深く関わっているからである。すでに見たように構文選択のテキスト形成的動機としての主題構造は、対人関係的動機としてのポライトネスと並んで、注目すべき強力な要因となっている。一方、Mann and Thompson (1987) で提案されているテキストの修辞構造 (Rhetorical Structure) は文法的単位としての節に左右されない論理・意味論的構造であり、本稿の議論の対象である構文選択の動機にも格関係交替現象にも間接的な関係しか持たないものと考えられる。Mann & Thompson (1987) の修辞構造は、まさにテキストのテキスト性を支える論理・意味論的首尾一貫性 (coherence) を構成するものであり、別の言い方をすれば、テキストの論理・意味論的合理性 (rationality) にかかわるものと考えられる。さらに SFL における文化のコンテクストとしてのジャンルについて言えば、ジャンルの種類は構文選択に多大な影響を与えるだろう。科学論文、新聞報道記事、料理のレシピ、パソコンのマニュアルなどにおいて頻度の高い構文というものが考えられるだろう。この点においてジャンルの種類は構文選択の間接的動機と言っても良い。では、SFL の中心的研究分野の一つである「ジャンル構造」はどうだろう。ジャンル構造はジャンルの種別を特徴付ける論理・意味論的展開構造である。Mann and Thompson (1987) の修辞構造よりもさらにマクロな構造である。それは、テキストのトップダウン的形成の最上位にある構造である。やはり、それは修辞構造の場合と同様、個々の構文の選択に関しては、間接的な動機であると

言って良いだろう。

4. おわりに

本稿は、構文選択の動機と格交替現象の全体を網羅したものではない。今回はそのような動機の1部を取り上げたにすぎない。しかしいくつかの興味深い事項が明らかになった。整理すれば、(1) SFLのメタ機能の内、観念構成的メタ機能における過程構成の変化は構文選択の結果であって、その動機や理由ではないこと。(2) 過程構成のパターンの違いは異なる言語間の違いとして顕著に現れ、翻訳の際の構文選択の制約となる場合があること。(3) 構文選択の動機として、対人関係的動機があり、ポライトネスなど社会的語用論の分野をSFLのメタ機能と結合して考える必要があること。(4) 構文選択の動機にテキスト形式的動機があること。「何についての文にするか」、「メッセージの起点を何にするか」、「先行文とのリンクをどうするか」と言った視点から文の主題が選ばれ、それが構文選択の強力な動機となること。(5) 文どうしの連結だけでなく、文化的コンテキストとしてのジャンルの種類も、構文の選択に影響を与えること。(6) さらに、主題の選択やジャンルの種類に応じた構文選択は、テキスト形式的動機であると同時に、様々な意味で対人関係的動機であるとも考えられる。このような総合性はSFLの原則に沿ったものである。(7) 格関係交替現象について言えば、態の変換のように選択された構文が文法格だけを変える場合もあれば、文法格と意味格の両方を変える場合もあることが分かった。

(本稿は、2008年3月発行の、『平成19年度新潟大学人文社会・教育科学系プロジェクト経費「諸言語の格関係交替現象に関する統語機能構文論的研究」研究報告書』〈研究代表：秋 孝道〉のpp.43-49に掲載された「構文選択の動機と格関係交替現象 —機能言語学の視点—」に部分的な加筆修正を加えたものである。なお、2008年3月30日～31日、東京「下北沢タウンホール」で実施された第2回SFLセミナーで上記研究報告書の論稿について解説する機会を得て、いくつかの有益なご意見を頂戴した。セミナー会員の先生方に厚く御礼申し上げる。)

【注】

- (1) SFLにおける過程構成のタイプは次のように分類される。物質過程 (material process), 存在過程 (existential process), 関係過程 (relational process), 発言過程 (verbal process), 心理過程 (mental process), 行動過程 (behavioural process) の6種である。
- (2) 生成文法においては、日本語の文法格は「が」や「を」などの後置詞のように名詞句の外側に独立して表示されるが、英語の文法格は名詞句の一部として名詞句の内部に取り込まれ、代名詞化した場合の音形を決定すると考えられている (長谷川 1999 : 56-57 参照)。
- (3) 久野 (1978: 130, 146, 299) はカメラ・アングル, 視点, あるいは共感度 (empathy) という概念を用いて (8b) のような受け身文の不適切性を説明している。つまり受け身文のカメラ・アングルは「新しい主語の指示対象寄り」であるという原則と、発話当事者の視点ハイアラーキーである「話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、

自分より他人寄りの視点をとることができない」との矛盾として説明される。久野の談話規則は、SFLのテキスト形成的メタ機能とも大いに関係があるが、より認知言語学的な原則のように思われる。

【参考文献】

- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 東京：大修館
- 龍城正明 編 (2006) 『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』 東京：くろしお出版
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』 東京：大修館
- ハリデー, M. A. K. 著, 山口 登・笈 壽雄 訳 (2001) 『機能文法概説 —ハリデー理論への誘い—』 東京：くろしお出版
- 福田一雄 (2002) 「文法的メタファーとは何か—M. A. K. ハリデー (1994) 第10章をめぐって—」 『英文学会誌』 第29号 (新潟大学英文学会) 35-54頁
- Brown, P. and S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mann, W. C. and Thompson, S. A. (1987) "Rhetorical Structure Theory: A Theory of Text Organization," ISI/RS-87-190. 800-553-6847 WWW.NTIS.60V: ADA 183038. USC/Information Sciences Institute. pp.1- 82 (From Livia Polanyi ed. *The Structure of Discourse*, Norwood, N.J. Ablex Publishing Corporation, 1987) .
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd Edition. London: Edward Arnold.